

Braasch, 1989). 我が国に生息するオオイチモンジシマゲンゴロウ *Hydaticus pacificus conspersus* の越冬個体は、水深の浅い泥湿地の落葉下もしくは落葉下の泥中(松本・磯崎, 1988) や、山間の小川が涸れてできた水溜まりに堆積した湿った落葉下(今井, 1988) において発見されている。コシマゲンゴロウの越冬個体は、ガマやイネ科植物が茂る湿地付近の石の下(山崎, 1993) や、堀上脇に堆積した枯草の下(相蘇ら, 2015) において発見されており、本種は水域から陸上に移動して越冬することが示唆されている。したがって、適度な湿り気が保たれた植物体の根際や泥などの堆積物の下に潜るという越冬様式は、本族の多くの種で共通している可能性がある。

本族を含め、我が国に生息するゲンゴロウ類の越冬場所に関する知見は不十分である。今後、断片的な観察例であっても報告が行なわれ、より多くの種において越冬場所が解明されることを望む。

末筆ながら、図2の写真を提供して下さった高橋玄氏、文献の情報を教えて下さった中島淳氏、本稿の執筆に際しご助言をいただいた筑波大学生命環境系・助教の横井智之氏と筑波大学保全生態学研究室諸氏には、この場を借りて感謝申し上げます。最後に、本稿を審査していただいた吉富博之氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 相蘇 巧・越川心暉・丸山大河, 2015. 茨城県におけるコシマゲンゴロウ上陸越冬個体の採集記録. 月刊むし, 531: 61.
- Braasch, D., 1989. Zur Überwinterung der Imagines der Dytiscidae (Insecta, Coleoptera). Faunistische Abhandlungen, 16: 141-146.
- Galewski, K., 1964. The hibernation of the adults of the European species of Dytiscidae (Coleoptera) out of water. Polskie Pismo Entomologiczne, 34(3): 25-40.
- 井上大輔・中島 淳, 2009. 福岡県の水生昆虫図鑑. 株式会社マツモト, 北九州.
- 市川憲平, 2016. タガメやゲンゴロウたちの危機. 昆虫と自然, 680: 5-8.
- 今井初太郎, 1988. 表紙さつえいメモ. インセクタリウム, 25: 30.
- 環境省, 2017. 別添資料5) レッドリスト(2017)【昆虫類】. URL: <http://www.env.go.jp/press/files/jp/105449.pdf> (2017年10月15日アクセス).
- 松本英明・磯崎年光, 1988. オオイチモンジシマゲンゴロウの越冬場所について. Elytra, 16(2): 64.
- 森 正人・北山 昭, 2002. 日本のゲンゴロウ. 株式会社文一総合出版, 東京.
- 中島 淳, 2013. 過去から現在における水生甲虫相の変遷. 福岡県での事例. 昆虫と自然, 635: 16-19.
- 山崎一夫, 1993. コシマゲンゴロウを冬季に石下から採集. 月刊むし, 269: 36-37.
- Wewalka, G., 2016. Revision of the species of the *Hydaticus (Prodatiscus) pacificus* group of the Palearctic, Oriental and Australian Regions, and description of a new species of the *H. (P.) bihamatus* group (Coleoptera: Dytiscidae). Koleopterologische Rundschau, 86: 9-45.

(渡辺黎也 305-8572 つくば市天王台 1-1-1
筑波大学保全生態学研究室)
(e-mail: biolfc14.cb@gmail.com)

【短報】岡山県におけるキボシチビコツブゲンゴロウの記録

キボシチビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky) は筆者が知る限りでは、茨城県と千葉県、静岡県、愛知県、三重県、奈良県、京都府、広島県、香川県、福岡県、長崎県、宮崎県の12府県でしか記録されておらず、現存する生息地もわずかにしか残されていない状況である(秋田, 2008; 藤本・上手, 2003; 深川, 2015; 濱田ほか, 2008; 池竹, 2012; 井上・中島, 2009; 小阪, 2004; 森・北山, 2002など)。2017年版環境省レッドリストでは絶滅危惧IB類に指定されている。この度、筆者は岡山県内で本種を採集したので、岡山県初記録として報告する。

1 ex., 岡山県倉敷市種松山山系, 27-VIII-2017, 筆者採集・保管(図1)。



図1. キボシチビコツブゲンゴロウ.

ジュンサイやヒシが繁茂する良好な池のへりで、抽水している単子葉類ごと網ですくい取り採集した。同所的にコツブゲンゴロウやマメゲンゴロウなども得られたほか、ジュンサイ葉上にはガガ

ブタネクイハムシ、ジュンサイハムシも確認され、岡山県南部の平野部には良好な環境が残っていることがうかがえた。なお、6月にも同所でガガブタネクイハムシを確認している。しかし、同所でウシガエルのオタマジャクシも確認しており、外来生物による捕食圧や植生減少、水質悪化などの環境悪化も懸念される。また、種松山地域は青野(1981)によって包括的な甲虫類の調査がなされた結果が報告されているが、ゲンゴロウ科はチビゲンゴロウとコシマゲンゴロウの2種しか記録されておらず、特に小型水生昆虫に関してははかり調査の余地が残さ

れていると考えられた。本種は全国でも数カ所しか現存する生息地が知られておらず、また県内でも調査の余地がかなり残されていることから鑑みて、今後の早急な調査と保全策が望まれる。

末筆ながら、本種を同定していただき、本報への報告を勧めて下さった石川ふれあい昆虫館の渡部晃平氏、本種の発見の契機となった貴重な池に案内をしていただいた倉敷市の守安敦氏、引用文献についてご教示下さった三重県の秋田勝己氏と広島県の秋山美文氏、大塚健之氏、香川県の藤本博文氏、長崎県の松尾照夫氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 秋田勝己, 2008. 志摩市大王町船越池のゲンゴロウ類と捕食性外来動物について. 甲虫ニュース, 162: 31-34.
- 青野孝昭, 1981. 倉敷の自然(種松山山系) 4. 種松山山系の甲虫. 倉敷市衛生局環境部, 69-83.
- 藤本博文・上手雄貴, 2003. 香川県善通寺市与北町で採集した水生甲虫類. 甲虫ニュース, 143: 16-17.
- 深川元太郎, 2015. 長崎県本土の水生甲虫類(コップゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科・ミズスマシ科・ホソガムシ科・ダルマガムシ科・ガムシ科)の記録. 長崎県生物学会誌, 76: 24-44.
- 濱田将大・木谷昌喜・島添信一・井上大輔, 2008. 東広島市の水生昆虫. 広島虫の会会報, 47: 1-6.
- 池竹弘旭, 2012. キボシチビコップゲンゴロウを愛知県名古屋で採集. ホシザキグリーン財団研究報告, 15: 10.
- 井上大輔・中島淳, 2009. 福岡県の水生昆虫図鑑. 福岡県立北九州高等学校 魚部, 195 pp.
- 小阪敏和, 2004. 東広島市の甲虫類(2) -水生の甲虫-. 広島虫の会会報, 43: 19-22.
- 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京, 231 pp.

(末長晴輝 710-0807 倉敷市西阿知町 833-8
サンシャイン A205)

【短報】外来種ムネアカオクロテントウを京都府で発見

ムネアカオクロテントウ *Synona consanguinea* (Poorani *et al.*, 2008) は、中国、台湾、ミャンマー、タイ、ベトナム等のアジア地域に分布するテントウムシ科オオクロテントウ属に属する甲虫である (Poorani *et al.*, 2008). インドにおいて本属のテントウムシは、マメ科植物の主要な害虫であるマルカメムシ類の天敵として知られている (Poorani *et al.*, 2008). 国内では、2014年に東京都で初確認されて以降 (中西ほか, 2016), 神奈川県、群馬県、大阪府、奈良県で報告されるようになった (中西ほか, 2016; 齋藤ほか, 2016; 伊藤・古山, 2017). 今回、京都府の木津川市において本種を採



図1. 木津川市の個体 (左: 背側; 右: 腹側)。



図2. 採集地点のクズ群落 (木津川市市坂弓田付近)。

集したので報告する。

2exs., 京都府木津川市市坂弓田, 30. IX. 2017.; 1ex., 京都府木津川市城山台, 30. IX. 2017, 池田採集・保管。

今回、ムネアカオクロテントウが採集された地点は、高架下や新興住宅地周辺のクズ群落内であり、そこにはマルカメムシが大量に生息していた。筆者は、木津川市で本種が採集される以前に、奈良市でも採集していたことから、近接する両地域間の侵入や移動は比較的容易であった可能性が示唆される。異なる地域への侵入方法として、当然、自らの飛翔による分散が考えられる。しかし、今回採集された地点はすべて、工事現場付近や比較的交通量の多い場所であった。そのことから、車両の移動や資材の運搬等にもともなう非意図的導入であった可能性が示唆され、広域分散が危惧される。一方、わが国におけるムネアカオクロテントウの分布は、現時点で関東地方と近畿地方に限られている。詳細な侵入経路や在来生態系への影響等を解明していくことで、本種に対する効果的な防除手段の検討にもつながる。

末筆ながら、文献提供頂いた大阪市立自然史博物館の初宿成彦氏と、投稿にあたり有益なご助言を賜った近畿大学農学部の澤島拓夫、早坂大亮の両博士に厚くお礼申し上げます。